

自由執筆

三角縁神獸鏡の産地問題

昨年は「魏鏡説」が著しく後退

新井 宏

富岡謙三が、三角縁神獸鏡が魏鏡であるとしてから、間もなく百年になる。この説は、戦後、主要古墳間の三角縁神獸鏡の分有関係などから「小林理論」として完成され、三角縁神獸鏡が「卑弥呼の鏡」であることが「定説」となった。

ところが、昭和三十七年には森浩一が「魏鏡説」に対する疑問を唱え、昭和四十五年頃から、古田武彦、奥野正男らアマ系研究者から「国産説」が相次いで提出された。それでも考古学界は完全に無視していた。

状況が変わったのは、昭和四十六年に中国考古学界の大御所、王仲殊が来日し「呉の工人が日本で作った」との説を発表したことである。何しろ、中国の本場の学者が魏鏡ではないと否定したのである。

それでも、日本の考古学界は魏鏡説を維持し、新聞も若干の疑問符はつけながら「卑弥呼の鏡」として報道し続けている。

しかし実際には、今世紀に入る頃から、魏鏡説は防戦一方に追い込まれていたのである。

従来、魏鏡説であれ国産鏡説であれ、銘文や文様など表面観察による研究が主体であったが、近年、鏡の製作方法や内部組成の研究が大巾に進展したからである。

実は青銅鏡というものは、複製する方法がたくさんある。だから、表面観察だけで、その製作地を推定することなど不可能である。特に、三角縁神獸鏡は日本から既に五六〇面も出土しているが、未だ中国からの確実な出土例がない。大流行したのは確実に日本のみであり、ルイビトンの偽物のように複製鏡が製作された可能性が高いのである。

その意味で注目すべきは、三角縁神獸鏡の八〇%以上が同型鏡(同範鏡)だという点である。中国鏡にはほとんど同型鏡(同範鏡)は見られないので、三角縁神獸鏡だけの特徴であり、いわば大量複製技術なのである。

また、三角縁神獸鏡には表面に凸線キズという欠陥が認められるが、中国鏡にはない。見かけは同じであっても、内部品質、特に組成は製作地によって異なるかも知れない。これらの点に関して、近年の大きな進展は、

- (1) 中井一夫が鏡のキサゲ加工から、青龍三年鏡は踏返し鏡であることを論証したこと
 - (2) 鈴木勉が二層式鑄型(粗粒外型に細粒内型)を用いて凸線キズの再現に成功したこと
 - (3) 新井宏が、鉛同位体比の研究から、異なる年号鏡を後にまとめて鑄造していることや同時期の中国鏡との比較で、大部分が国産であることを論証したこと
- などである。

王仲殊は最新の論文で、「日本の著名な金属考古学者新井宏氏が、三角縁神獸鏡に含まれる鉛同位体比率の測定に基づき、……：三角縁神獸鏡が中国の「魏鏡」ではなく、日本で製作されたことを確認」と称賛してくれた。

さて、今年になってからの進展である。ひとつは、前出の鈴木勉が三角縁神獸鏡の鑄造後の補修痕を精密比較して、埋葬古墳毎に特徴が異なり、鑄造地が古墳に近いところにあつたとしたことである。もちろん、これは国産説の決定版である。

もうひとつは、奈良橿原考古学研究所が昨年末に読売大ホールで開催した公開講演会「三角縁神獸鏡研究の最前線」で、凸線キズの研究から、三角縁神獸鏡の「舶載鏡」が誰もが国産鏡と認める「仿製鏡」と、同一の鑄

型(外型)で作られていたことを明らかにしたことである。「船載鏡」も国産であった。

筆者もこの講演会に招待されて参加したが、所長の菅谷文則は「国産説」を唱える。しかし、発表者はなぜか歯切れが悪かった。

また、これも年末のことであるが、朝日新聞は、三角縁神獸鏡が魏の都のあった洛陽で見つかり、西川寿勝が検分して、三角縁神獸鏡に間違いないと報道した。中国から一枚も出土していないと云う「魏鏡説」の弱点が解消された訳であるが、古物商から入手した経過から他紙は無視している。

筆者が見る限り、これは「本物」かも知れない。それは、日本ではほとんど類例のない二十センチ以下の直径鏡であり、福永伸哉が三角縁神獸鏡の特徴として挙げる「長方形鈕孔」ではなく、「円形鈕孔」だからである。

三角縁神獸鏡の「祖型」が中国にあったことは、おそらく間違いない。しかし、大流行した日本で、そのほとんどが複製されたとうのが「国産説」なのである。

だから、中国で三角縁神獸鏡が続々と発見され、日本の三角縁神獸鏡と比較できる日が来るのを待っていた。

(本稿は『日本計量新報』の新年特集に掲載したものである。余白の関係で転載した。)